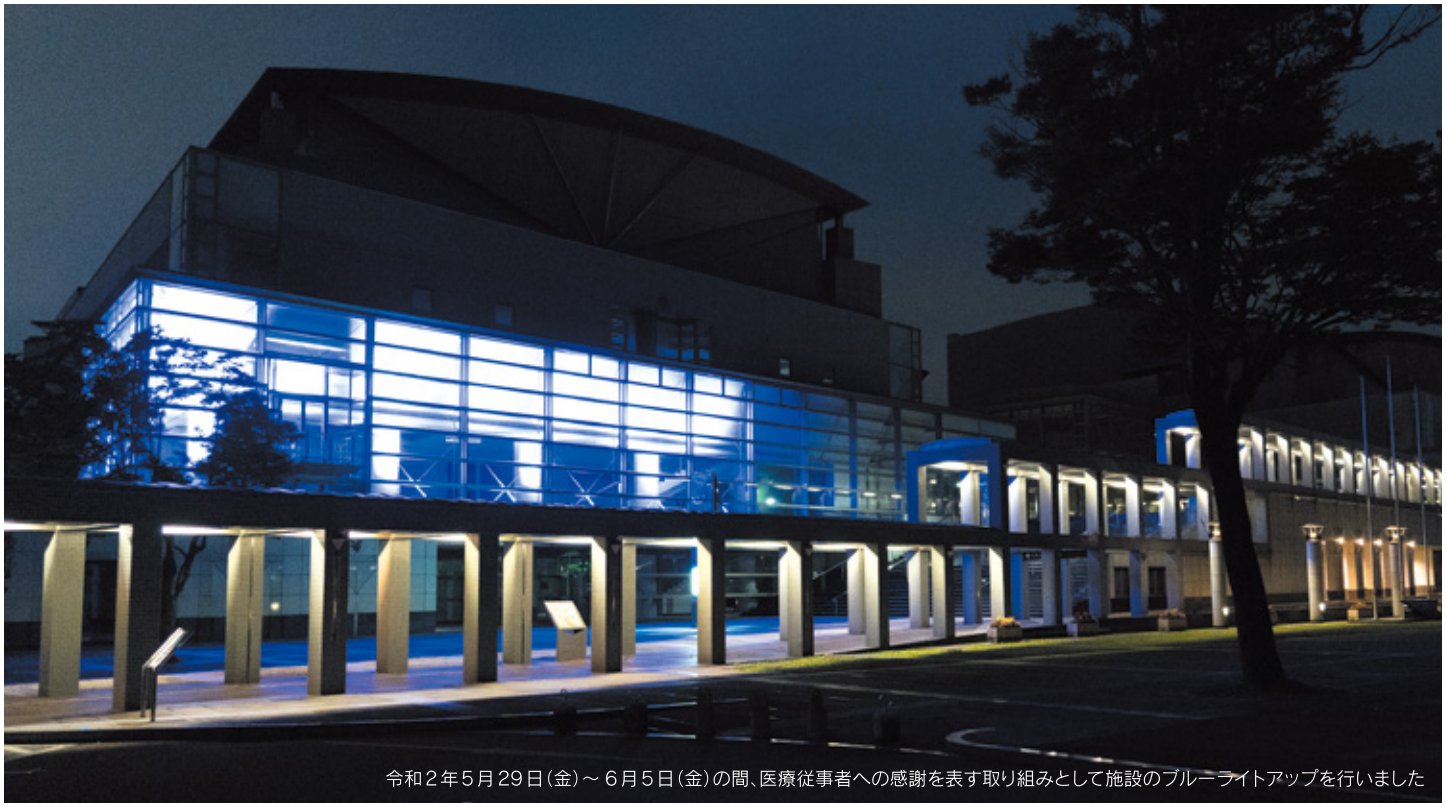
Crescendo
MEDIKIT ARTS CENTER くれっしぇんど
2020.6
vol.138


令和２年５月29日（金）～６月５日（金）の間、医療従事者への感謝を表す取り組みとして施設のブルーライトアップを行いました

スターンさんのシルクロード

「人が旅をした。だから心が運ばれた」1980年代に放送されたＮＨＫ特集「シルクロード」、その番組提案の冒頭の一行です。アジアから欧州への50万キロの道、東西を結ぶ壮大な旅はモノを運び、技術を伝えそして文化を交流させた…それは人の心を結びつける道だったと、提案書のこの一行が12回にわたる番組のエッセンスを見事に表現しています。

私は時おり思います。25年前、アイザック・スターンさんは宮崎に「心を運ぶ旅」を始めたのではないか…「歌うように、心で弾きなさい」とスターンさんは若い演奏家たちにヴァイオリン講習会のたびに繰り返されました。応えるように徳永二男さんはじめたくさんの演奏家が心に響く演奏をと努力されてきました。宮崎国際音楽祭はスターンさんという旅人が拓いた音楽のシルクロードではないかと。

今年25回目の音楽祭を新型コロナウイルス感染症の影響で断念せざるを得ないことになりました。音楽祭を愛し支えていただいた皆さまに申し訳なく、言いようのない悔しさを噛みしめています。しかしスターンさんのシルクロード、心をつなぐ音楽の旅、その拠点としての音楽祭は今後も絶えることなく継続して参ります。皆さまの変わることのないご理解とご支援をお願いいたします。

宮崎国際音楽祭 総監督：佐藤 寿美

徳永二男が語る音楽祭のこれまで

1996年に「宮崎国際室内楽音楽祭」としてスタートした宮崎国際音楽祭。第1回から総合プロデューサー、そして第16回から音楽監督を務めてきた徳永二男氏に、音楽祭のこれまでについてお話を伺いました。

聞き手：奥田佳道（音楽評論家）

奥田　徳永さんが総合プロデューサーを務め、NHK交響楽団にいらした青木賢児さん（宮崎県立芸術劇場名誉館長）やアイザック・スターンとともに、1996年に「宮崎国際室内楽音楽祭」が始まりましたね。スターンとは、いつ頃からつながりがあったのですか？

徳永　最初にお会いしたのは、1980年代半ばです。スターンと江藤俊哉先生が出演したデュオ・コンサートの室内合奏団で僕がコンサートマスターを務めました。メンバーに堀米ゆず子さんや加藤智子さんといった、これから世界で活躍していく人たちがいて壮観でしたね。

スターンは、自分がソロを弾くからついてこいっていう人ではないんですよ。「一緒の気持ちで、一緒の表現をみんなで作り上げよう」という姿勢で、とても細かい。それこそスターンが一番絶好調の時で、手ぬぐいを巻いて迫力があって、結構怖かったですね。ビビって弾いていたのを覚えています（笑）。その時に教わった指使いは、日本ではあまりやっていなかった奏法だったので「こういう奏法もあるのか」ととても勉強になりました。

音楽祭が始まる直前だと、カーネギーホールの101周年記念コンサートで小澤征爾さん、サイトウ・キネン・オーケストラと出演しました。バルトークのヴァイオリン協奏曲第1番を演奏したんですけど、ソリストのスターンとコンサートマスター、アシスタント・コンサートマスターの3人でアンサンブルをする箇所があり、スターンの楽屋で合わせることになったんです。この時、スターンに大変細かく指導していただいたことが、今も強く印象に残っています。スターンに「ちょっとこい」と呼ばれ、楽器を持っていったら「ああしろ、こうしろ」「もっとヴィブラートは、最初はこう抑えて」と、やってみせてくださって。ヴィブラートをコントロールするのは一番難しく、緊張すると速くなってしまう。それで一生懸命勉強したのを覚えています。

音楽祭のはじまりについて

奥田　そんなスターンを招いて音楽祭を始めることになった！

徳永　1993年にN響のヨーロッパ公演があって、フランクフルトのバーで青木さんと偶然お会いしたんです。そこで僕が「将来こんなことができたらいいな」って夢を語ったんです。ちょうどその年に青木さんが館長を務める宮崎県立芸術劇場がオープンを控えていて、「ハードはできたけどソフトは何をやるか」ってことで、「それやりましょうか」って話になりました。それで僕と青木さんたちで、直接、松形元知事のところに持っていったんです。そこから準備に2年かかりました。

さて、やるからにはどうするかってなった時に、僕の頭の中にはもうスターンしかいなかった。当時「日本人の演奏は素晴らしく、ミスがなく完璧だ。マシーンのようだ」とよく言われていた時代だったんです。「でも、心が……」というのが、僕の頭の中になんとなくあって。それで日本人の音楽を豊かにするために、音楽を習うのではなく、一緒に作る場というのがあれば、日本人の音楽家にとってこんないいことはないなと思ったんです。そうなったらもうスターンしかいないんですよ。

スターンは教え魔なんです。廊下で会うと「お前、楽器持ってこい。さっきの演奏はダメだ。自分は30代の時こうやっていて、40代はこう、50代はこうやってきて、今やっとこの指使いが見つかって、もっと早く気が付けば良かった」ということを全部教えてくれる。そのときに教わったことは未だに守っていて、僕の宝物になっています。そういうことを我々に、厳しく暖かく伝えてくれる、そういう人と一緒に音楽ができたら最高だ、日本の音楽家にとってこんなに良いことはない。そう思い、スターンに声をかけたいと言ったら、みんな「それは無理だ」って。でもダメ元で直接声をかけたらいいんじゃないかと、お声かけしたら「お！徳永がやるのか！でも宮崎ってどんなと

人物紹介

アイザック・スターン（1920～2001）
20世紀を代表する偉大なヴァイオリニスト。
宮崎国際音楽祭に第1回から第6回まで出演。

人物紹介

青木賢児
元NHK交響楽団理事長。
宮崎県立芸術劇場館長を務め、現在名誉館長。

ころなんだ？」って。

ちょうど宮崎県立芸術劇場が開館してすぐに、ニューヨーク・フィルハーモニックの公演があった。それでスターンはNYフィルの人に、宮崎がどんなホールか聞いたようです。そしたら、NYフィルがホールを絶賛してくれて。それで「1回だけ、徳永もいるし行ってやるか」って来てくれたんです。驚きましたね。そこでスターンが「室内楽を大いにやりたい」ということで宮崎国際室内楽音楽祭が始まりました。

奥田　最初の音楽祭は3月開催でしたね。

徳永　今でこそ5月開催ですけど、当初はみやざきフラワーフェスタと同じ時期の3月でしたね。スターンに「宮崎ってどんな気候だ？」って聞かれて、青木さんが「アメリカのマイアミみたいだ」って答えたんです。それで僕が宮崎の空港にお迎えに行ったら、スターンが「宮崎は寒いじゃないか」って。それでそれ以降5月になったんです、その一言で（笑）。

奥田　フロリダ半島のリゾート、マイアミのつもりで来たら、ちょっと寒かったんですね（笑）。緊張されましたか？

徳永　最初の練習が一番緊張しましたね。モーツァルトの3番のコンチェルトをやったんですよ。スターンは、自分の耳でちゃんと聴くまでは信用しないんです。「あいつは日本一、こいつも日本一」と言っても全然、怖い顔をしている。けれど、1フレーズ終わったらね、僕の顔を見てニコッと笑った。自分でもいい音が出たのが分かったので、「これはひょっとしていける？」と思いました。そしたら、休憩中にスターンが「二男、お前の耳は確かだ」ってハグしてくれました。

初めて宮崎空港に降り立ったスターン（1996年）

それからは、リハーサルもとんとん拍子でいきました。スターンの機嫌もとても良くて。宮崎の方たちのおもてなしが温かくて、気配り心配りが素晴らしく、居心地も良かったんだと思います。

リハーサル風景（1996年、第1回）

スターンの音

徳永　スターンが出す音は、何というかうまく言葉で表現できないような……濃厚で、じゃあ硬いかというと硬くない、シルクの音をぎゅーっと締めたような、それでいて力強くて柔らかくて、幅があってふかふかで。「こういう音はどうやって出すんだ？」って不思議に思うほど。ただその音を知ることが、我々にとってとても重要なんです。知ると、ああいう音を出してみたいって気持ちになって、工夫のきっかけができる。スターンが来てくれたことが日本の音楽家にいろいろ刺激を与えて、考えるきっかけができたんじゃないかなと思いますね。

奥田　徳永さんのような音楽家からみても、スターンの指使いとかテクニックに惚れ惚れするんですか？

徳永　あの当時は、僕だってそこそこ弾けていたんですよ（笑）。N響のコンサートマスターを18年やって、いろんなところでソリストをして。けれども、はっきり言ってその頃は全然分からなかった。自分はある程度できていると思っていたけど、スターンと何がどう違うのか分からなかった。違うということは、はっきり分かる。けれど、時間が経てば経つほどこういうことだったんだって、後でじわじわ分かってくる。スターンの奥深さの裏にあるもの、これまでのすさまじい経験の数々や日々の音楽への向き合い方が感じられ、やはりすごい人だなと。

奥田　スターンが日本のメンバーと練習した時に、印象に残っている指導というのはありますか？

徳永　言葉で指導するのではなく、やってみせるんですよ。「最初の音はこうだ！」と弾いてみせると、みんな一生懸命真似をする。すると、「今までの音は何だったの？」って信じられないぐらい違ってくる。華やかさや色合い、響きとか全てが豪華になる。オーケストラって、指揮者によって音が全く違いますよね。オーケストラの意識が、その指揮者に集中する。スターンも同じことなんです。みんながスターンの一挙手一投足を見逃さないよう、身を乗り出すようにして集中していましたね。

記念すべき第1回での本番（1996年、第1回）

終演後の一幕

奥田　最終日の終演後に、出演者の皆さんがステージ裏でお疲れ様の乾杯をするときに伺うと、スターンが「この音楽祭を続けるように」と激励していましたね。

徳永　最後の公演が終わると、日向夏の皮を入れたウォッカを舞台袖のパーティで出してくるんですよ。「みんな飲め」って。ウォッカは冷凍庫に入れてあるんだけど、度数が50～55度と高くて凍らない。トロっとする。それを次々に開けて、「大丈夫、大丈夫」って言いながら、がばがば飲んでいましたね。

舞台袖の一幕（1996年、第1回）

音楽祭のメンバーについて

奥田　第1回音楽祭の時に、徳永先生の後ろやサイドで弾いていたのはどんな方でしたか？

徳永　ヴァイオリンの漆原啓子さんや川田知子さん、チェロの向山佳絵子さんとかですね。考えられる最高の人たちからお声かけしました。

奥田　すでに我々が期待のソリストとして知っている方々ですね。

徳永　これまで、中心のメンバーはあまり変わっていないんです。けれども、いろいろと変化はありました。当時まだ独身だったヴァイオリンの漆原朝子さんも結婚して出産されて。その時のお子さんが、今では大学生ぐらいになっていますね。

奥田　最初の頃、何人かの出演者がベビーやお子さんを連れていらしてましたね。「子守、家族サービスもしなきゃ」という方も（笑）

徳永　フルートの高木綾子さんなんて音楽祭に参加したての頃は20代前半だったのに、今では子どもが3人も生まれて。

奥田　宮崎観光ホテルで、お子さんを一人抱っこして、もう1人連れている姿を見かけたことがあります。

第1回の忘れられない1曲

奥田　先ほど、モーツァルトの3番のコンチェルトが忘れられないと仰っていましたが、他にも忘れられない曲はありますか？

徳永　第１回の時にスターンと一緒に演奏した、ブラームスの弦楽六重奏曲ですね。日本では、この曲を第１番、第２番という分け方をしていて、アメリカでは調性（変ロ長調、ト長調）で判別しているんです。いざ始めようってなった時に、じゃあ調弦して……と準備していたら、スターンの様子がおかしい。あれ？っと思って、スターンの譜面を見たら違うんですよ。我々でいう２番。我々５人は１番を持っていた。「これは大変だ！譜面が違う！曲が違う！」って。でもスターンに直してもらうわけにはいかないので、どうしようってなりましたね。

奥田　皆さん急遽２番に変更することになったんですか？

徳永　そうです。これがとても忘れられない。急いで譜面を探したら、宮崎で持っている方がいたので、その人に持ってきてもらって、僕らは個人練習。そこにNHKの小林悟朗さんが、CDを持っていて「徳永さんこれ聴きなさい」って。実は僕ら、その当時２番をほとんど演奏したことがなかった。曲を聴いたことはあっても演奏したことはないので、必死になってCDを聴いて。夜中もあまり寝ずにCD聴いて合わせて弾いて、って。しかも音を並べるだけでは室内楽にはならないので、どこからどう流れを受け継いで、どう渡してとか、短い時間で必死になって覚えましたね。

演奏を終え、ステージ上で挨拶するスターンと演奏家たち（1996年、第1回）

他の人には真似できない、スターンの演奏

徳永　スターンが70代後半の時のリサイタルを見に行ったんですよ。その時のピアニストが巨匠イェフィム・ブロンフマン。彼が「スターン、またすごくなった」と言ったんです。たしかに、客席で聴いていると、人を惹き付ける、歌う歌わないじゃなくて語りかけてくる。これは他の人には絶対真似できない。語りかけてくる強さがあって、心にどんどん入ってくるんです。

それは40 ～ 60代ぐらいの、どんな曲でも全くさらわなくたって弾ける、仁王立ちでぱっと弾けるというのとはまた違って、さらにすごくなったんだなと。年齢を重ねて、スターンの演奏スタイルも少しずつ変わっていったんだと思います。温かみや包容力といったものが、もうすごかったです。それまでは、とにかく迫力があって、ヤッシャ・ハイフェッツがスターンの演奏を客席で聴いて「俺は奏法を間違えているんじゃないのか？」と思って、長い間ステージで演奏しなかったっていう逸話があるくらい、スターンの音は大砲のような音でした。70代後半になってもそういう迫力は残っていましたけど、また違う良さが加わりましたね。

スターンは、譜面をぱっと置いて楽器を持たない。譜面を見て、イメージを高めるんです。頭の中でイメージができあがると、すっと楽器を持って、すぐステージで弾いてしまう。自分がこの音楽をどう表現したいか、という思いがすごく強いですね。

人物紹介

ピンカス・ズーカーマン（1948～）

スターンの愛弟子でありヴァイオリン界の巨匠。
第6回から、音楽祭にはたびたび出演。

スターンの愛弟子ズーカーマン

徳永　スターンが最後（第６回）に来た時、ピンカス・ズーカーマンを連れてきたんです。演奏が終わって、松形元知事たちと会食がありまして、その場でスターンが「宮崎の音楽祭はこれで一流になった。なぜって、ここにズーカーマンがいるからだ。ズーカーマンが来ているってことは一流の音楽祭だ」って仰ったんですよ。

圧巻の演奏を披露するズーカーマン（2001年、第6回）

ズーカーマンが初めて宮崎に来て、モーツァルトの５番のコンチェルトを練習した時のことなんですけど、オーケストラが演奏して、彼がスッと出したときの音に、みんな「え！聴いたことない音だ！」って衝撃を受けたんです。しかも、弦楽器って弾く時に、弓を返さないといけないんですけど、ズーカーマンのは見ていたっていつ返しているか分からない。「これどうなってるんだ？」って、僕も下からのぞいたりしました。みんな信じられないという様子で、目で見て、耳で聴いて。最後の第３楽章を弾いた後も楽員が全員ぽかんと。それほどすごい。

奥田　漆原さんや川田さんが、練習でズーカーマンが演奏した時、休憩時間に客席の僕のところに来て「やばいよ、すごいよ」とか言いながら放心状態になってましたね。「何を今、聴いちゃったんだろう」みたいな。それで嬉しそうにまた舞台に戻っていく、そういう光景をよく覚えています。

徳永　だから、音楽家の皆さんから「ギャラもらってこんないい勉強できるなんて」って聞きますね。みんな音楽祭で得たものをそれぞれのホームに持って帰れる。みんな経験を積み重ねて、数年経つとズーカーマンの音のきっかけが少しみえてくる、これだけでもすごいことだと思います。

楽屋で指導するズーカーマン（2001年、第6回）

だから当初の「習うのではなく、一緒に音楽づくりに携わる場」というのは、いまだに生きていて、常にそういうことに敏感に反応できる素晴らしい音楽家が集まっているのが、宮崎国際音楽祭なんだと思います。

お茶目な一面も（2001年、第6回）

デュトワの時代、反則レベルの大編成オケ誕生

徳永　スターンがお亡くなりになった後、ズーカーマンやウラ

人物紹介

シャルル・デュトワ（1936～）

スイス出身の世界的指揮者。
第9～15回宮崎国際音楽祭で、アーティスティック・ディレクターを務める。

ディーミル・アシュケナージ、そして第９回からシャルル・デュトワに来ていただきました。

デュトワの得意なレパートリーというのはフランスやロシアもので、オーケストラでいうと大編成が得意なんです。けれども、室内楽をやらないというわけではなく、デュトワも「室内楽は大切だからやってくれ」と仰ったんです。彼はヴィオラ奏者出身なので、室内楽を続けることにご理解いただけたんだと思います。

でも、オーケストラの練習が結構きつかった。やっぱり我々はプロのオーケストラじゃない。今もそうですけど、超ベテランがたくさんいる中に、これから活躍する若手の音楽家たち、国際コンクールで優勝しているような人たちが後ろに控えているんですけど、その人たちはオーケストラの経験が浅い。でも、デュトワは世界で一流のオーケストラを指揮してきていたので大変でした。

奥田　宮崎国際音楽祭管弦楽団、このメンバーはどのようにして決まっているんですか？

徳永　弦楽器はぼくが全部責任をもっています。管楽器はそれぞれのトップで、フルートは高木綾子さん、オーボエは古部賢一くん、ファゴットは吉田將くん、クラリネットは三界秀実くん……という風にそれぞれお願いしています。できるだけ一番良いメンバーを、自分たちが「この人とやりたい」と思う人を引っ張ってきてくれないかって。そのおかげで、いろんなオーケストラの首席の人たちがセカンドにいてくれる。普通では考えられないようなメンバーでできていて、昔からずっと同じ仕組みです。

大編成オケでのリハーサル（2004年、第9回）

そもそも、スターンが「若い人をどう育てるか」ということを大切にされていたんです。アジアの若い人を育てようと、当初は中国や韓国からも若い演奏家を呼んで講習会をして、2007年からミュージック・アカデミーをやるようになりました。これは成功だったと思います。そこから育った子たちが今、ヴァイオリンの三浦文彰くんや小林美樹さん、チェロの上村文乃さんのように音楽祭に戻ってきて、オーケストラにも参加してくれる。それから日本音楽コンクールで１位や２位になった子や、国際コンクールに入賞した子たちが、みんな戻ってくる。この時期、留学していても帰ってきてくれる。とても嬉しいことです。若い子たちはベテランと一緒にやることで学べることもあり、我々は若いエネルギーを吸収するというように、今とてもいい感じですね。

スターンによる講習会（1996年、第1回）

第1回ミュージック・アカデミー受講生による「新星たちのコンサート」。左から三浦文彰、小林美樹、上村文乃。（2008年、第13回）

奥田　宮崎国際音楽祭のオーケストラは、ある意味、反則ですよね。最終日のオペラにここ何年か必ず足を運んでいますが、楽屋で指揮の広上淳一さんが「普通、３日でオペラができるわけがないんだ！」って。僕が「広上さん、あなたのおかげでもあるけれど、オーケストラと中村恵理さんとか福井敬さんたちのおかげだよ」って冗談を言うと、広上さんが「このオケ、反則のオケだからできるんだよ。いや～、このオケはずるいね！」っていつも仰っています（笑）。もちろん、広上さんの音楽と指揮が素晴らしいのですが。

アカデミーから羽ばたいた方、この音楽祭のために帰ってくる方、音楽祭から羽ばたいた方など、皆さんこの時期に宮崎に集まってますよね。公式プログラムにメンバーが細かく載っていて、会場でこれを眺めるのが楽しみなんです。これをいつも眺めては「反則だな」と。「なんでこの人が第２ヴァイオリンを弾いているの？」とか。

徳永　みんな、この時期にきちっとスケジュールを空けといてくれるんですよ。嬉しい話です。

奥田　ヨーロッパに留学している人やドイツのオーケストラのアカデミーにいる人、国内オーケストラの首席奏者、室内楽やソロの担い手が「５月は宮崎国際音楽祭からお声がかかるかも知れない」と思ってスケジュールを前もって空けておく――そんなこともあるようですね（笑）。日頃、なかなかお話する機会のないコンサートマスターや首席奏者の人たちと宮崎でお会いするのは、僕も楽しみなんです。スイスのバーゼルに留学されていたチェロの上村文乃さんも「宮崎には毎年帰ってくる感じ。また素敵なアンサンブルが出来る」と嬉しそうでした。

デュトワの時代になって変わったこと

奥田　デュトワ時代で、印象的だったことは？

徳永　リムスキー＝コルサコフの交響組曲「シェエラザード」ですね。N響で演奏した時と全然違う音楽になったので、すごく印象に残りました。

N響でもなかなかやらないような曲や挑戦的な曲もやりましたね。デュトワの素晴らしいところは指揮もそうですけど、「新しいものも積極的にとりあげよう」と仰って、アイデアとしてエクスペリメンタル・コンサートを始めたことなんです。

奥田　演劇ホールでピアノの野平一郎さんがコンテンポラリーものをやる、あのシリーズですよね。

徳永　そうです。我々もそれは素晴らしいことだと思いました。最初は演劇ホールのステージをフラットにして、バルトークの「２台のピアノと打楽器のためのソナタ」をやりましたね。今、ああいう超現代音楽をあるレベルの音楽家がやるのは宮崎しかないって皆さん仰るんですよ。これがとても嬉しくて、続けなきゃいけないなと。

現在のエクスペリメンタル・コンサートの先駆けとなった“Experience”コンサート（2005年、第10回）

宮崎のお客様の反応

奥田　宮崎のお客様は、とても反応が良いですよね。

徳永　僕らが一番感じるのは、ステージに出た時のお客様の迎えてくれる姿勢が、ほかとは全く違うんですよ。宮崎はお客様の目がキラキラしている。「あー！出てきた！」っていう雰囲気が全

然違う。第１回からこれまで続いてきて、いろんな意味で街の人たちとのコミュニケーションが随分とれるようになりましたね。

奥田　オペラのコーラスで子どもたちやアマチュアの皆さんが出てくると、これぞ宮崎の音楽祭だなって感じがしますね。

徳永　我々が一番考えているのは、いかにして宮崎の方たちとの接点を多くするかということなんです。「500円コンサートの日」では県民の方々によるコーラスやブラスバンド、ジュニア・オーケストラもやるし、できるかぎりいろいろ取り組みたいと思っています。

写真で楽しむ音楽祭

奥田　会場のロビーに、公式カメラマンの三浦興一さんが作った素敵なパネル写真が展示されていて、それに見入っていて、開演直前に慌てて席に戻ることがあります（笑）。劇場の外でも写真展をやりましたよね。

徳永　みやざきアートセンターや美術館でもやりましたね。

奥田　第20回のガラ・コンサートの時にも三浦さんの写真展を見た記憶があります。

徳永　第７回には、亡くなったスターンの写真展をやりましたね。美術館で演奏しました。

県立美術館で開催された写真展およびコンサート（2002年、第7回）

近年のプログラム構成について

奥田　ところで徳永先生は以前からタンゴをレパートリーとしていますよね。

徳永　京谷弘司さんという素晴らしいバンドネオンの巨匠とお知り合いになれて、一度別の会場で演奏したら意外と評判が良くて。淡路七穂子さんのピアノも強靭なピアノで、こっちもやっているうちに段々上手になってきちゃって（笑）。

毎回好評の「魅惑のタンゴ」（2010年、第15回）

奥田　近年のプログラムは、メインコンサート、スペシャルコンサート、500円コンサート、教育プログラムとさまざまな内容で構成されていますが、この形ができたのはデュトワの後なんですか？

徳永　大枠を作ったのは青木さんです。青木さんがお退きになったあと、佐藤寿美さん（宮崎県立芸術劇場館長）が総監督におなりになって、佐藤さんの提案で今までの公演に「Oh! My! クラシック」、そして僕の提案で「500円コンサート」が加わりました。これが大好評でしたね。「Oh! My! クラシック」も初回ゲストに小泉純一郎さんをお迎えして、大盛り上がりでした。

小泉純一郎元総理をゲストにスタートした「Oh! My! クラシック」（2016年、第21回）

オペラに秘められたスターンの思い

奥田　華やかな音楽祭を締めくくる、広上さんのオペラもありますよね。

徳永　嬉しいことに、ここ数年はコンサートマスターをライナー・キュッヒル先生にやっていただいてます。キュッヒル先生と一度対談させていただいた時に、「オペラは最低でも5,000回やっている」とお話されてました（笑）。

今では毎年恒例となったオペラ公演（2019年、第24回）

奥田　この広上さん指揮によるオペラで音楽祭が最終日を迎えるというのは素敵ですね。

徳永　実はね、こういう話があったんですよ。スターンが来ていた頃、毎年全コンサートが終わった翌朝スターンに呼びつけられて、これから音楽祭をどうしたらいいのかということを、彼が方向を示してくれたんです。その時に「オペラを考えたらどうだ？」とずっと言われていたんです。

ただ、コンサートホールは技術的に難しい。演劇ホールはできるけど、ただ収容人数は1,000人ほどと少ない。それでもスターンは「なんとか考えろ」と仰っていて。それでオペラを温めていたんです。いずれ何かしらの形でやるべきだろうな、ということでオペラが始まり、第20回の時には、広上さんと相談して「トゥーランドット」を全幕コンサート形式でお届けしました。

奥田　スターンからオペラを提案されたというのは、すごく意外ですね。大バッハ・フェスティバルとか、大コンチェルト・フェスティバルとかではなくて？

徳永　毎回、終わった後に「次はオペラを考えろ」って仰っていたんです。

奥田　以前チェロの巨匠ムスティスラフ・ロストロポーヴィチにインタビューした際「オペラを知らなければ、シンフォニーも室内楽も演奏出来ませんよ」というオペラ愛をよく聞いたものです。スターンも同じだったんですね。

これからの宮崎国際音楽祭

奥田　今後、こんなことができたらいいなとか、あるいはさらに良くしたい部分とかありますか？

徳永　スターンの時代から守ってきた、若い演奏家を育て、そしてその若手が音楽祭に帰ってくる、という循環がこれからも大切なことだと思っています。ですので、そういう若い演奏家が毎年増えていくようにやっていきたいです。これからどう変化させていくか、ということも当然考えていますが、音楽祭をガラッと変えるのではなく、これまでつながってきたこの道を、基本の路線を変えずに続け、次につながる新たな試みをしていきたいと思います。ありふれた言い方ですが、より魅力的で、皆さんに喜んでいただける音楽祭にしていきたいと考えています。

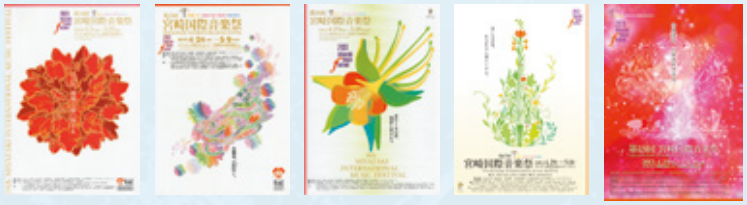
　そして、演奏家にとって、素晴らしいメンバーとともに演奏し、憧れのソリストたちと共演できること、こんな幸せなことはありません。それを胸に、メンバー全員が素晴らしい気持ちで音楽に向かい、それが宮崎の皆さんに伝わって喜んでくださればと思います。

写真：K.Miura

これまでの音楽祭ポスター 一挙公開！

第 1 回（1996 年）
音楽祭のはじまり

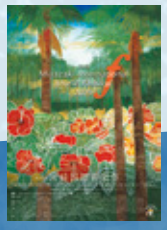
第 6 回（2001 年）
最後のアイザック・スターン出演



第 9 回（2004 年）
シャルル・デュトワ初登場

第 20 回（2015 年）
記念すべき 20 回目の音楽祭

第 22 回（2017 年）
宮崎出身の画家、立山周平氏が作画



第 25 回（2020 年）
宮崎出身の画家、弥勒祐徳氏が作画

メディキット県民文化センター（宮崎県立芸術劇場）　自主事業公演チケット情報

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、主催公演の一部を変更もしくは延期・中止することといたしました。なお、チケットの払い戻し等の対応が必要な公演につきましては、調整が済み次第順次ご案内させていただきますので、お手元にチケットをお持ちの方は無くさずに大切にお持ちください。内容を変更して開催する公演については、新型コロナウイルス感染拡大の防止策、感染リスクの低減策を実施いたします。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

事業名	開催日程	備考
第25回宮崎国際音楽祭	~~4月29日(水・祝)～5月17日(日)~~ 中止	—
アートな学び舎2020 「一行さんのおどる・ワークショップ」	~~6月7日(日)~~ 9月12日(土)に延期	—
アートな学び舎2020 「ディレクター・カフェ」	6月21日(日)	参加者に個別にご案内します
パイプオルガン プロムナード・コンサート vol.165「オルブラ」	6月27日(土)	入場者数100名限定で実施(完売)
ニグリノーダ「赤桃」	~~宮崎:6月27日(土)　木城:6月28日(日)~~ 中止	動画配信予定
はじめてのクラシック♪ #6 ～ソプラノ(うた)～	~~7月8日(水)~~ 12月23日(水)に延期	—
'20みやざきの舞台芸術シリーズⅠ 後藤早恵チェンバロリサイタル ～21世紀に息づくチェンバロの音色を紡いで～	~~7月10日(金)~~ 中止	—
おんがくのおもちゃ箱 シリーズPart.11 「夏休みだよ！全員集合！」	~~7月18日(土)~~ 中止	動画配信予定
'20みやざきの舞台芸術シリーズⅡ 演劇ユニット チックタックパークPresents 「チクタクコント スポーツ」	~~7月18日(土)~~ 延期(日程未定)	—
Let's 和の音♪ かじってみよう！ふれてみよう！ (変更)邦楽いろはコンサート	~~7月24日(金・祝)~~ 中止 7月25日(土)	24日の楽器体験は行わず 25日に邦楽レクチャーコンサートを実施予定
トライアル・シアター2020	~~8月8日(土)・8月9日(日)~~ 延期予定	日程変更及び規模縮小の方向で調整中
シリーズくなるほどクラシックコンサート>vol.9 『ベートーヴェンからブラームスへ』	宮崎：9月12日(土) 小林：9月13日(日)	—
'20みやざきの舞台芸術シリーズⅢ 「ブラスの饗宴2020」 ～今、ここに集う宮崎県 ゆかりの金管楽器奏者～	~~9/19(土)~~ 中止	—

Attention(ご注意)　◎記載情報は変更になる場合があります。

新型コロナウイルスの感染防止対策について

新型コロナウイルスの発生に伴い、当劇場では以下のとおり感染防止対策を行っておりますので、利用者、来場者の皆様には、ご理解とご協力をお願いいたします。

◎感染防止のため、館内および各ホールの出入り口にアルコール消毒液を配置しています。
◎お客様と接するスタッフにつきましては、マスクを着用して案内・対応をさせていただいております。

利用者、来場者の皆様方におかれましても、手洗い、消毒、マスクの着用や咳エチケットなど感染防止対策をお願いいたします。また、風邪のような症状のある場合は、来館をお控えいただきますようお願いします。

- 離れて　お並びください
- 手指の消毒に　ご協力ください
- 消毒を　おこなっています
- 換気を　おこなっています
- マスク着用を　実施しています
- 手洗いを　実施しています

お問合せ　公益財団法人 宮崎県立芸術劇場 MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER
〒880-8557 宮崎市船塚3-210
http://www.miyazaki-ac.jp/
TEL.0985-28-3208　FAX.0985-20-6670
Twitterとfacebook随時更新中！「フォロー」と「いいね！」お待ちしています。

企画・制作・発行／公益財団法人宮崎県立芸術劇場　宮崎県宮崎市船塚3-210 TEL0985・28・3208
印刷・製本／藤屋印刷株式会社　宮崎県宮崎市橘通西1-4-14 加田屋ビル2F TEL0985・32・5380